

論文の内容の要旨

論文題目 一なる天、異なる宙——モンゴル帝国期ペルシア語中国暦の研究——

氏 名 諫 早 庸 一

本論は、13・14 世紀に中央ユーラシアを政治的に統合したモンゴル帝国治下のイランにおいて、ムスリムの博学者とキタイの賢人とが「天文対話」によって生み出したペルシア語中国暦を分析するものである。この暦は、異なる文化的・学術的背景を持った人同士の知の営みの産物であった。こうした接触・対話は、そもそもいかなる場で起こったのか。対話を行った 2 人はどのような背景を持つ人物だったのか。対話の結果生み出されたこの中国暦は、どのような性質を持っていたのか。彼らの背景の違いは、対話やその産物としての中国暦の内容にどのように反映しているのか。本論に並ぶ各章は、上記の質問に 1 つ 1 つ答えていく構成となっている。文明や文化のような枠組みの恣意性が問われ、「近代/西洋科学」を基準としてそれ以外の地域の「科学的要素」を捉える史観が再考を余儀なくされている昨今、人間の営みに目を注ぎ続けてきた人文知が扱う対象として、人間の知のふれあいやその結晶を見て取ることのできるこのペルシア語中国暦は、かつてとは違った輝きをもって我々の前に姿を見せている。

当代随一の博学者として名を馳せたナスィール・アッディーン・トゥーサー(Naṣīr al-Dīn al-Tūsī: 1201–1274 年) が編んだ『イル・ハン天文表 (*Zīj-i Ilxānī*)』(1272 年編) には、「キタイ暦」の名で中国暦が記される。このキタイ暦そのものの分析を軸に、それを生み出した人物やその社会的背景を広く考察することで、この暦をめぐる「物語」が浮かび上がっ

てくる。そして、全 9 章におよぶこのキタイ暦の分析を経て、我々が紡ぐ「物語」のうちで最も大きい流れを表現するとすれば、それは「暦による「シルクロード」の往来」となる。

「天命を告げる者」としてモンゴル宮廷から格別の恩顧に与ったムスリムの博学者トゥーサーは、マラーガ天文台の建設を主導し、「天命を知るためのもの」として『イル・ハン天文表』を編んだ。その過程で彼は、君主フレグの宮廷にいたキタイの賢人「フー・ムン・チィ」と対話し、彼から学んだキタイ暦を自らの天文表に入れ込む。このキタイの賢人は、フレグの西方遠征に伴ってイランの地を訪れた道教徒であった。漢地から至った彼が伝えた暦は、当時彼の地で官暦として用いられていた『重修大明暦』にその天文定数を依拠しつつも、唐代編纂の「小暦」であった『符天暦』に見える簡易的な計算法を用いていた。この「特殊な」暦は、これまでモンゴル帝国の特に初期にモンゴルを支えた中央アジアの人的集団としての「ウイグル」の媒介を経た暦だとされてきた。しかし実のところ、トゥーサーにキタイ暦を伝えた「フー・ムン・チィ」は漢地からイランの地に至った道教徒であり、キタイ暦の二大典拠であった『重修大明暦』と『符天暦』とは、いずれも当時の華北で用いられていた。翻って当時の「ウイグル」と『符天暦』との繋がりを見出すことはできない。このキタイ暦は「ウイグル」の媒介を経ることなく、「シルクロード」を通じて、漢地から直接イランの地へと伝えられたものであった。

ただし、『符天暦』は元来、ホロスコープ占星術に際して必要な天体位置計算をするためのものであった。メソポタミア・地中海地域に起源を持つこの占星術は、インド亜大陸を経て、唐代までには中華王朝の支配領域にも伝えられた。『符天暦』もそのなかにインドや中国およびその 2 者のいずれにも属さない要素など、雑多な暦要素を内包している。おそらくこの暦法はシリア語やサンスクリット語など、特定の言語で書かれた「原典」を持つようなものではなく、地域・文化・宗教を異にしつつも「シルクロード」で共に生きた人々が、「星占い」という共通の目的のために編み出した暦法であったと思われる。モンゴル期の「ウイグル」とは関連を見出すことができなかったキタイ暦であるが、その暦要素には確かに中央アジアの影響を見て取ることができる。「シルクロード」を経て唐代に西方から東方に伝わった『符天暦』およびその暦要素は——その伝来にあたっては東シリア教会のキリスト教徒の果たした役割が大きかった——時を経てモンゴル期に今度は道教徒の手によって「シルクロード」を逆方向へ渡り、キタイ暦の一部としてイランの地へともたらされた。

中央ユーラシアの広大な領域を版図に収めたモンゴル帝国のなかには、中華王朝の支配領域とイスラム教文化圏の東側とが内包されていた。「時」が政権によって厳しく管理されていた東方に対して、西方の「時」はあまりにも多様であり、政権にその管理および一元化の意図は極めて薄かった。東方の「暦」は天文計算の集成である「暦法」と、それによって表される記年・日付法としての「こよみ」、およびその「こよみ」に占星術要素が組み合わせられ、広く支配領域に頒布された「カレンダー」といった複数の要素から成り立って

いた。一方で、西方の天文学を代表するジャンルの一つであったズィージュ/天文表は、天文計算の集成という点では東方の「暦法」に類するものであったが、その目的はホロスコープの作成であり、占星術要素が域外にある「暦法」とはこの点が異なっていた。数百年の時を経て、「シルクロード」を往来した「暦」は、こうしてズィージュに記される。その際には「暦」の多元的な要素のうちで、ただ「こよみ」のみが取り出され、表象された。「こよみ」が併存する西方において、東方では支配装置として機能していた「暦」はその政治性をはぎ取られ、多種ある「こよみ」の一つとしてズィージュに記され、それと他の「こよみ」との換算が記されることになった。

ただし、トゥーサーは最初からキタイの賢人の知識を「こよみ」の一つとしてのみ受け入れていたのかといえ、おそらくはそうではない。ズィージュの編纂の主目的の一つはホロスコープの作成にあった。そしてキタイ暦の典拠の一つである『符天暦』はホロスコープ占星術のための暦法であった。ホロスコープ占星術が唐代に東方へと伝わったことはすでに述べたが、イスラム教文化圏においては、遅くともアッバース朝翻訳運動期には、この種の占星術が隆盛を見ており、それに関する多くの作品を生んでいた。こうした条件のもと、その学術背景の全く異なっていたムスリムの博学者とキタイの賢人とが「天文対話」をするにあたって、ホロスコープ占星術のみが「共約可能性」を担保することのできる要素であった。しかしながら、キタイの賢人の伝えた知識の程度は、トゥーサーを満足させるものではなかった。東方へ伝わったホロスコープ占星術の計算基盤となっていたプトレマイオスの『簡便表』およびその注釈は、イスラム教文化圏の天文学者たちがそれを克服して久しいものであった。「シルクロード」を還ってイランの地に至った暦要素は、すでにその時分・地域においては時代遅れのものとなっていたのである。

これがキタイ暦の分析を通じて我々が紡ぐ「物語」である。異なる学術背景を有した2人の学者が対話によって生み出したキタイ暦に見える暦要素は、数百年の時を経て「シルクロード」を往来したものであった。それぞれの文化圏の比較検討や、科学への寄与という視点によらず、あくまで対話を為した人物とその結果生み出された暦に注目して議論を展開した結果、浮かび上がってきたのが「シルクロード」を往来する暦なのである。天は一つであり、そこから数理的に天体運行を捕捉することや、それを解釈して占星術的に用いることは、様々な地域で共通に行われていた。しかし、それぞれの文化的・地域的・宗教的背景に基づき、その一なる天にいかなる宇宙を構想するかについては、非常に幅があり、しかもそれは個別に独立しているわけではなく、時に重なり合い、時に組み合わせり、時には優劣が論じられて、選択されていった。こうした一なる天と異なる宙の関わりの具体相を、本論で取り扱ったキタイ暦をめぐる物語は伝えてくれる。